

朗読夢舞台 其の十八

第一部

ことしかぎりの

山本兼一作『利休にたずねよ』より



「なんと、命の太い男なのだろう」
宗恩は夫・利休の寝姿を見て、心の中でそう呟いた。
自信に満ちた、畏れを知らぬように泰然としている。
若い頃は、それがとてつもない頼もしさに見えた。
その利休に長男の道安が遺言の話を持ち出した。
切腹の三月前、正月の事であった。

原作小説の中盤第十章。後妻である宗恩がこの
主人公です。宗恩と利休との複雑で微妙な関係が
丁寧に描かれています。
茶という美の世界に生涯を捧げた男の背中を見つ
める妻のまなざしが、痛いほど伝わってきます。

第二部

十三夜

樋口一葉作



斉藤主計の娘、関は十七歳の時、奏任官原田勇に
見初められ、身分の違いを越えて結婚。七年後の十
三夜の宵に一粒種の太郎を婚家に残したまま離婚を
決意して父母の許へ。
父親に諫められ、死んだ気持ちで子供の為に婚家へ
戻る決心をする。〈上の段〉

十三夜の月が皓皓と照る上野の山を、お関の乗る
人力車がゆっくりゆっくりと行く。……と、突然
車夫が車を止め、「もう車を引くのがいやになった
から降りてくれ」という。その車夫こそ誰であろう、
幼い日お互いに心を寄せ合った高坂緑之助その人の
変わり果てた姿だった。〈下の段〉

1941年・東京都生まれ。
樋口一葉の文体の美しさと、ことばの響きに魅了され、
子育て一段落の40歳の時、一念発起。朗読の勉強を始める。
中川貞子氏にボランティア朗読を、三上左京氏に舞台朗読を師事。
全国各地に「南水ひとり語り」として活動をしている。
平成3年 日本文化振興会より「国際芸術文化賞」
平成23年 下町人間の会より「下町人間庶民文化賞」
平成28年度（第71回）文化庁芸術祭優秀賞受賞
平成3年より沖縄に通い続け、学校公演、その他言葉の大切さを伝えている。

くまざわ
熊澤
なんすい
南水



交通アクセス

- ゆいレール 「牧志駅」下車 ▶ 徒歩5分
- 那覇市外線バス停「牧志」下車 ▶ 徒歩3分
- 那覇市内線バス停「てんぶす前」下車 ▶ 徒歩1分
- 有料地下駐車場 81台収容

那覇市ぶんかテンプス館

☎098-868-7810(4F事務所)

〒900-0013 沖縄県那覇市牧志3-2-10

<http://www.tenbusu.jp/index.html>

✉ask@tenbusu.jp

